

## 趙伯驥筆「万松金闕図」の考察 - 実景描写の観点から -

西尾歩（大阪府立大学大学院）

「万松金闕図」（北京、故宮博物院蔵）は、その巻後の跋文において趙孟頫が万松金闕図と題名し趙伯驥の作と断じているものである。本図に関しては、最初に徐邦達氏、続いて嶋田英誠氏による論考等があり、おおよそ、杭州に在った宮闕を南宋初期に画いた、趙伯驥の作とするのが通説である。しかし、具体的に杭州のどの場所を画いたものであるかは明白ではなかった。この点に関して、発表者が杭州の実際の景観と比較してみたところ、本図の表現は、銭塘江北岸にある六和塔から東を望んだ景観とよく合致することが分かった。すなわち、巻頭は銭塘江、画卷中央は宮観のある白塔嶺、そして巻尾には進龍橋が架かる毛湫峪からの流れが画かれていることになる。したがって、題に用いられている「万松」という語句は、皇城の北西にあった万松嶺を指しているのではないことも分かる。

視点となった六和塔については、『咸淳臨安志』や曹勛「六和塔記」によると、開宝3年（970）に創建されたが北宋末には荒廃し、隆興元年（1163）に七層に再建されたことが知られるので、本図の制作年代を推定する材料と為し得る。さらに、諸文献の記述から本図に画かれる宮観の性格を把握し、六和塔から見た銭塘江の記述や付近に関する詩文によるイメージ、および、靈芝など符瑞に関する記述も併せて、本図に画かれた図像の意味や制作時期を考察する。

このように、実景に対応する絵画として本図を理解することができるが、様式的に近い作例として、建炎4年(1130)に作られた米友仁筆「雲山図」（クリーブランド美術館蔵）を挙げ、図像的には、瑞祥のモチーフが共通する、政和2年（1112）の徽宗筆「瑞鶴図」（遼寧省博物館蔵）を取り上げ、本図の表現内容を考察する。特に、本図には梅花と満月が画かれているので春正月の元宵節が表されていると考えられ、同じ時節を表現した「瑞鶴図」や「華燈侍宴図」（台北、故宮博物院蔵）と共通する作画背景があるとみなせる。これらの事柄と、実在の景観を基にしているという景観写生的要素とを併せて、本図の絵画史における位置づけを確認する。また、実際には存在しない円錐状の鋭い峰々を本図上部に画くことには、どのような表現意図があったのかという問題について、同時期の類品と比較し、考察を加える。そして、趙伯驥についての伝記や、画史類など関連資料の内容を確認し、南宋前半期における絵画観をあらためて捉えなおしてみたい。